

2025年7月13日 聖霊降臨後第5主日(特定10)(ルカ10:25~37)

律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

(ルカによる福音書10章37節)

今読まれた福音書の物語は、「良きサマリア人」と呼ばれるものです。「隣人愛」を伝える意味でこの聖書の物語を用いること、これはよくあるように思います。しかしイエス様が伝えたかったことは、それだけではありません。もっと大きな意味が、この物語の中には隠されています。そのことを今日は皆さんと共に、分かち合っていきたいと思います。

さて、この「良きサマリア人」の話を、イエス様はどうしてなされたのでしょうか。それは「律法の専門家」と呼ばれる人が近づいてきて、イエス様に話しかけてきたからです。彼は立ち上がり、イエス様を「試そうとして」こう言ったそうです。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるのでしょうか」。永遠の命を受け継ぐ、簡単に言うと、「どうしたら救われますか」ということでしょう。ただ彼は、イエス様を「試そう」としていました。誘惑です。それに対してイエス様は、「律法には何と書いてあるか」と返します。彼は律法の専門家ですから、律法のことほとんど頭に入っていたと思います。だからすぐに答えることができました。「神を愛し、隣人を愛することだ」と。「正しい答えだよ、その通りにしたらいい」、そのようにイエス様は答えられます。

ここまでの会話を見ていて、何も不自然な点はありません。律法に書いてあるとおりのことを、そのままおこなったらいい。そ

の当時、ユダヤの人たちは律法を守ることによって、自分たちが神さまの前に正しい者になれると考えていました。その通りのことをイエス様は語られたのです。しかし会話は続いていきます。

律法の専門家は、自分を「正当化しよう」としてこう言います。「では、わたしの隣人とはだれですか」と。なぜここで、彼は自分を正当化しようとしたのか。その意味については、また後ほど考えていきますが、イエス様はこの律法の専門家の間に対して、「良きサマリア人」のたとえを語っていかれたのです。

たとえ話のあらすじはこうです。ある人が道を歩いている途中で追いはぎに襲われた。彼は服をはぎ取られ、半殺しにされてしまった。そこを祭司が通りかかったが、道の向こう側を歩いて行った。同じようにレビ人も、道の向こう側を歩いて行った。

ところがサマリア人がそこを通りがかったとき、彼は憐れに思い、手当てをし、介抱をして、宿屋につれていった。そして宿賃までも置いて、去って行った。このような物語をイエス様は語られたのです。

追いはぎに襲われた人は、ユダヤ人でしょう。祭司とレビ人は、エルサレム神殿で奉仕をする人たちでした。彼らは道を下っていたと書かれています。つまりエルサレムで奉仕を終え、エリコにある自分の家に戻ろうとするその途中だったと思われます。

「神殿でお世話をするような人が、なんて冷たい」と感じると思います。でもここには、理由があったのです。彼らは「汚れる」わけにはいかなかったのです。追いはぎに襲われた人は、半殺しにされました。遠くから見ると、動いていなかったかもしれませんが。もしその人がすでに亡くなっていたら、その人に触れることは「死体に触れる」こととなります。すると律法では、「汚れた」

状態になってしまうのです。また血を流していたとしたら、その血に触れても汚れてしまう。だから彼らは道の向こう側を通ったのです。この彼らの「正当な」理由によって、倒れた人は見殺しにされました。汚れてしまったら、清められるまでの期間、彼らは仕事をするができなくなります。仕事ができなくなると、家族は路頭に迷う。保険とか、休業補償とか、そういうものなどありません。だから彼らは、倒れた人をほおっておくことこそ、「正当な」ことだと思っていたのです。

一方、サマリア人はどうでしょう。先々週の福音書にも、サマリア人がでてきました。彼らはもともとユダヤ人と同じ民族で、サマリアは北イスラエル王国の首都として栄えていました。しかし紀元前 721 年の北イスラエル王国滅亡後、サマリアに異民族、外国の人たちが多く侵入してくるのです。そしてサマリアに残っていたユダヤ人と婚姻関係を結び、サマリア人と呼ばれる民族が生まれました。しかしユダヤ人は自分たちの血筋をとて大切にしており、異民族、つまり外国人との婚姻は忌むべきもの、やってはダメだと考えていました。そのためにユダヤ人はサマリア人を蔑視するのです。彼らは隣に住んでいる民族でありながら、お互いに関わることがまったくくない人たちでした。ユダヤ人はサマリア人を忌み嫌い、血縁をないがしろにした民族として軽蔑していました。

サマリア人もユダヤ人と関わりたくないから、先々週の箇所ではイエス様が自分たちの町を通るのを歓迎しませんでした。そして律法でいう「隣人」という定義の中に、彼らはお互いの存在を入れてはいませんでした。

イエス様がなされたこのたとえ、一説にはこのサマリア人こそイエス様だと言われます。それはこのサマリア人が「深く憐れ

む」という場面が出てくるからです。ギリシア語の深く憐れむ、スplanクニゾマイという言葉ですが、これはイエス様にしか用いられません。

イエス様は民族の壁、宗教の壁を乗り越えて、憐れんだのです。律法の専門家や祭司、レビ人は、「正当な理由」のもとに、隣人という対象を狭めていきました。でもそれは違う。本当の隣人愛とは、すべての人に注がれるものなのだと教えてくださったのです。

その根底には、神さまの深い愛があります。神さまがわたしたちを愛してくださったからこそ、わたしたちも人を愛したいと願うのです。その愛に包まれているからこそ、わたしたちも人に手を差し伸べていきたい、そのように生かされたいと祈るのです。

この律法の専門家がこの後、どのように生きていったのかは書かれていません。「行って、あなたも同じようにしなさい」というイエス様の言葉を、どのように理解したかはわかりません。しかしそれからまもなく、イエス様は十字架につけられます。

そのときに彼は、本当の愛の意味に気づかされたのではないのでしょうか。神さまがそれほどにまでわたしたちを憐れみ、わたしたちを介抱し、傷をいやしてくださる。

わたしたちもまたそのことを受け入れて、神さまと共に歩むときに、わたしたちは「良きサマリア人」として用いられるのではないのでしょうか。

わたしたちの隣人とは誰ですか、ではなく、わたしたちは誰の隣人になれるのでしょうかと問う。そしてそのことを、心に留めながら、この緑の期節を歩んでまいりましょう。